

to-不定詞と動名詞に関する一考察

友繁義典
人間環境部門

A Study of the *to*-Infinitive and the Gerund

Yoshinori Tomoshige
School of Human Science and Environment
University of Hyogo
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

There are cases where the *to*-infinitive and the gerund occur in the same syntactic environments. For example, both the *to*-infinitive and the gerund can be employed as subjects in sentences such as “To hesitate would have been fatal.” and “Hesitating would have been fatal.” There are also “It+be+adjective+to-V” and “It+be+adjective+Ving” constructions in English. For example, “It is difficult to find your way around in a strange city.” is an example of the former construction and “It is difficult finding your way around in a strange city.” is an example of the latter. Moreover, both the *to*-infinitive and the gerund follow the main verb as direct objects in sentences such as “I like to stay home at weekends.” and “I like staying home at weekends.” In the present paper, I consider what differences and common features the *to*-infinitive and the gerund have and, in particular, I attempt to pursue the subtle differences of meaning between them in cases where they are generally supposed to have no or little meaning difference in the same syntactic structures.

Keywords: futurity, fact, actuality, non-actuality, conceptual distance, source-path-goal

0. はじめに

to-不定詞と動名詞のいずれも文の主語として生起するだけでなく、主動詞の直接目的語として生起する。また、「it+be+形容詞構文」においても形容詞の後に to-不定詞と動名詞のいずれも生起する。第 1 節で to-不定詞と動名詞がどのような意味を表すのか見た後、両者が「it+be+形容詞構文」の中で用いられている場合について考察を行う。第 2 節で、to-不定詞を中心に観察した後、第 3 節で、動名詞を中心に観察する。第 4 節で同じ動詞が両者をとる場合について見る。

1. to-不定詞と動名詞

1.1. to 不定詞が表す意味、動名詞が表す意味

to-不定詞と動名詞に関しては、古くは、Sweet (1903: 120)、Poutsuma (1904: 604)、Kruisinga (1931: 193)、Jespersen (1940: 193)、Zandvoort (1957: 29) などに論考が見られる。彼らは共通して、特定の事象に言及する場合に to-不定詞が選択され、その一方、一般的な事象に言及する場合に動名詞が選択されると説明している。例えば、Jespersen (1940: 193) は、I hate lying (the vice in general). と I hate to lie (in this particular case). を例にあげ、動名詞は一般的な事象を、一方 to-不定詞は特

定の事象に言及するとしている。近年では Taylor (2002: 433) も “... the ‘to’-infinitive tends to be associated with a specific instance of the process in question, often with a future orientation, whereas the *Ving* form tends to be associated with a type specification.” と述べ、次例をあげている。

- (1) a. My doctor advised me to take more exercise.
b. Doctors advise taking more exercise.

Taylor が述べるように、確かに、(1a) は特定の場面での医者对患者に対する推奨が述べられており、一方、(1b) では一般的な医者による推奨が述べられていると解釈できる。また、Dirven (1989:125) にも次のような例が見られる。

- (2) a. He is keen on working. (= general state)
b. He is keen to do it. (= one single act)

さらに、Thomson and Martinet (1980: 222) も、特定の行為に言及する場合は、(3a) と (3b) のように to 不定

詞が用いられ、(3c) と (3d) のように行為・行動が一般的な意味を表す場合は、動名詞が用いられると述べている。

- (3) a. To hesitate would have been fatal.
 b. To obey the laws is everyone's duty.
 c. Hesitating would have been fatal.
 d. Obeying the laws is everyone's duty.

したがって、Thomson & Martinet (1980: 222) は、次の例では動名詞は不可であると述べている。

- (4) He said, 'Do come with me.' It was impossible to refuse.

以上のように、多くの学者が to 不定詞は「特定性」を表すのに適し、一方、動名詞は「一般性」を表すのに適していると認識していることを確認することができる。

しかし、Duffley (2003: 325) は、to-不定詞を主語に持つ (5a) と (5b) を例にあげ、それぞれが「一般的な陳述」を表していると述べている。

- (5) a. To understand American politics is . . . to know people . . .
 b. To err is human, to forgive, divine.
 (Alexander Pope)

確かに、(5a) (5b) に関して、Duffley が述べるように、それぞれの内容が「一般論」であると解釈することができる。さらに、Duffley (2003: 325) は、to-不定詞が特定の事柄に言及するといふのであれば、次の (6a) が容認可能であるはずだが、そうではなく (6b) の動名詞を含む文が適格であると述べている。

- (6) a. *To drink all that milk has upset the baby's stomach.
 b. Drinking all that milk has upset the baby's stomach.

すると、(6a) と (6b) は、to-不定詞が特定のな内容に言及し、動名詞が一般的な内容に言及するとする説を支持できない例ということになる。また、Duffley (2003: 335) は Brown corpus と Lancaster-Oslo/Bergen corpus の調査後、“... there is no significant difference between the gerund and the infinitive as to their

capacity of expressing particularity and generality.”と述べ、Brown corpus では、主動詞が過去時制の 19 の -ing 形を伴う例はすべて特定のな内容に言及していたと報告している。さらに、Egan (2008: 47) も to-不定詞補部が、特定のな内容ではなく、まさに「一般的な内容」に言及している例として次のような例文をあげている。

- (7) First of all because Italians *don't like to go abroad*

ここでも、(7) は、イタリア人の一般的な特徴づけがなされている文であると考えられるので、like to go abroad の代わりに like going to abroad がふさわしいはずであるが、to 不定詞が用いられている。

以上のことから、to-不定詞が「特定性」を表し、動名詞が「一般性」を表すと明確に二分することには無理があり、いずれも特定性と一般性を表し得ることを見た。ただし、多くの学者が述べているように、to-不定詞が「特定性」を表し、動名詞は「一般性」を表す傾向は強いとしてよいであろう。

1.2. 仮想性と事実

Jespersen (1940: 166) は、to-不定詞の方が動名詞よりも想像上の事柄 (非現実) を表すのにより適していると述べている。確かに、次の各例は、to-不定詞が仮想的 (仮想的) な内容を表す (Duffley 2003: 336-337)。Duffley によると、次の (8a) の to perpetuate の代わりに perpetuating、また、(8b) の to ridicule の代わりに ridiculing を用いることはできないという。

- (8) a. *To perpetuate* wealth control led by small groups of individuals who played no role in its creation prevents those with real initiative from coming to the fore, and is basically anti-democratic.
 b. *To ridicule* them only pushed them farther into themselves.

上例のように、to-不定詞が主語として用いられている文の中には仮想的 (仮想的) な内容を表す条件節を伴う文と意味的に等しい例があることが確認できる。Duffley (2003: 339) は、(8a) と (8b) は、それぞれ次の (9a) と (9b) と意味的に等価としている。

- (9) a. If you perpetuate wealth controlled by small groups of individuals who played no role in its creation, that prevents those with real initiative from coming to the fore.
b. If you ridicule them, that only pushes them farther into themselves.

以上のように、確かに、to-不定詞が *prospective* あるいは、*hypothetical* な内容を表すのに適していることは事実である。また、Duffely (2003: 317) は、動名詞が主語になっている次の例は、「事実」を表していると言っている。

- (10) a. *Giving up* the violin opened a whole new career for Ilosa Schmidi-Seeberg ...
b. *Issuing* bonds for plant construction has brought new industries to certain regions.

実際、Declerck (1991: 468) も、to-不定詞節は、しばしば、推定的 (仮定的 な意味 (*putative or theoretical meaning*)) を持ち、その一方、動名詞節は、概して、一般的な事実 (*a general factual fact*) に言及すると述べて、次の例をあげている。

- (11) a. *To steal from the poor is disgraceful.* (=It is disgraceful that one should steal from the poor.)
b. *Stealing from the poor is disgraceful.* (=It is disgraceful when people steal from the poor.)

このように、なぜ to 不定詞に仮定的な意味が認められる場合があるのかというと、その核となる意味が「方向」を表すことが理由であると考えられるが、to の表す意味については以下で考察を行うことにする。

1.3. 主語としての to-不定詞と動名詞及び it+be+形容詞構文+to-V/Ving

Hudson (1971: 174-175) は、次の各例をあげて、it 構文と動名詞が馴染まないことを示している。

- (12) a. Going out this evening is out of the

question.

- b. *It's out of the question going out this evening.
c. Climbing up that hill always exhausts me.
d. *It always exhausts me climbing up that hill.

しかし、Hudson (1971: 175) は、次の (13b) では動名詞を伴う it 構文が許されると述べている。

- (13) a. Working so late in the evening is ridiculous.
b. It's ridiculous working so late in the evening.

さらに、次の Hudson (1971: 178) があげている各例を見ることにしよう。

- (14) a. *To have nude scenes on the stage is normal nowadays.*
b. *Having nude scenes on the stage is normal nowadays.*
c. *To have nude scenes on the stage is regrettable.*
d. *Having nude scenes on the stage is regrettable.*

Hudson によると、動名詞が主語になっている (14b) と (14d) が、to-不定詞が主語になっている (14a) と (14c) よりも、はるかに自然であるという。しかしながら、次のように、名詞句が外置されると、今度は、to-不定詞を伴う構文が普通であり、動名詞を伴う構文は普通でないか非文法的的であるという。

- (15) a. It is normal nowadays to have nude scenes on the stage.
b. *It is normal nowadays having nude scenes on the stage.
c. It is regrettable to have nude scenes on the stage.
d. It is regrettable having nude scenes on the stage.

上の (14a) ~ (14d) に見られるように、主語位置に to-

不定詞が来て動名詞が来てそれぞれの文は文法的である。しかし、その一方、外置が行われると (15b) のように非文法的な文が生まれる。その理由として Hudson は、述部が感情的反応 (emotional reaction) を表すものでなければ、主語として働く動名詞補部を外置することはできないと説明している。しかし、次の Postal (1974: 15) があげている例では、述語が感情的な反応を表すが、動名詞補部の外置が許されていない。

- (16) a. My talking to Melvin would be useless.
 b. *It would be useless my talking to Melvin.
- (17) a. Jim's doing that was wrong.
 b. *It was wrong Jim's doing that.

上の各例文では動名詞補部に具体的な固有名の Melvin や Jim が動名詞句の主語として用いられている。情報の流れの観点から考えると、固有名詞が主語になっている文は意味的に優位な旧情報として成立しているのであり、そのような旧情報を持つと考えられる My talking to Melvin や Jim's doing that は、旧情報を表すがゆえに文頭に置かれるのが自然である。しかし、(16b) (17b) のような「it+be+形容詞構文」では新情報が文末に置かれるのが自然であるのに、旧情報を表していると考えられる要素が文末に配置されているので、そこに情報伝達上の齟齬が生じているように思われる。それゆえに、(16b) と (17b) は、不適格と判断されているように思われる。上の例文以外にも外置構文で動名詞補部が許容されない例と動名詞補部が主語になっている例を以下に追加しておく (Postal 1974: 17)。

- (18) a. Shaving birds is illegal.
 b. *It is illegal shaving birds.
- (19) a. Saving money is important.
 b. *It is important saving money.

1.2. で見たように、一般的に動名詞が事実を表し to-不定詞が仮定的な内容を表すのに適するので、「it+be+形容詞構文」で to-不定詞が用いられると、仮定的あるいは理論的な意味を表し、その一方、「it+be+形容詞構文」で動名詞が用いられると、事実が述べられていると解釈できる。すると、旧情報である動名詞句を外置構文を用いて新情報に来るべき文末に配置することに無理があるという理由で (18b) (19b) も、不適格あるいは非文法的と判断されるものと思われる。

ところで、次のように形容詞 fun が用いられている例が Postal (1974: 16) に見られる。

- (20) a. It is fun kissing Gladys.
 b. It is fun to kiss Gladys.

(20a) と (20b) の違いは何であろうか。ここでは、to-不定詞が仮定的 (あるいは未来指向的) な内容に言及するのに対して動名詞が事実を表すとする説明があてはまるように思われる。したがって、次のように to-不定詞からの抜き出しは可能であるが、動名詞からのそれは不可能であるという違いもなずける (Postal 1974: 17)。なぜなら、一般的に新情報を表す要素からは移動が可能であるが、旧情報と考えられる部分からは、通常、要素の移動が可能でないからである。つまり、動名詞は事実を表す旧情報として、話し手と聞き手の双方の間ですでに共通知識となっている部分であるからだと思われる。

- (21) a. *Who is it fun kissing?
 b. Who is it fun to kiss?

では、it を仮主語にした構文であっても to-不定詞と動名詞のいずれも生起する場合についてはどうであろうか。次の Declerck (1991: 502) があげている例文を見ることにしよう。

- (22) a. It is fun playing / to play in such an excellent team.
 b. It has been a great pleasure meeting / to meet you.

Declerck (1991: 502) は、上例に見られるように、to-不定詞あるいは動名詞のいずれも「it+be+形容詞構文」に現れるが、to-不定詞を用いる方がはるかに一般的であること、また動名詞を用いた方がかなり informal であるという文体上の違いに言及している。(22a) に見られる playing と to play の意味的な違いについては Declerck は何も述べていないところからすると、恐らく両者に認識することが出来る程の意味の違いは認めていないのであろう。Swan (2016: 268) においても Declerck と同様に動名詞を伴う it 構文については to 不定詞を伴う it 構文と比べて informal であるという指摘があり、It was nice seeing you. や It's crazy of her going off like that. を例にあげている。しかし、Alexander (1988: 317) は、次の例をあげて、両者に大

差はないとしながらも、動名詞節は進行中の行為に言及し、一方 to-不定詞節は「一般的な内容」を含意すると説明している。

- (23) a. It's difficult finding your way around in a strange city.
b. It's difficult to find your way around in a strange city.

また、Declerck (1991: 502) は、to-不定詞補部と違って、動名詞補部を転移させることができると述べ、次のような例をあげている。

- (24) a. It was a real shock, seeing her picture in that gossip paper.
b. Didn't you think it was odd, his throwing up his job like that?

上の例に見られるように、動名詞補部を転移することができるが、それが可能なのは、恐らく、話し手の主観的な感情を表す述語（形容詞や名詞）が用いられている場合に限られるように思われる。話し手の主観的な感情を表すような述語が用いられている場合に限りて動名詞補部が転移されている例は、Emonds (1976: 124-5) においても見られる。Emonds によると、たいていの英語の話し手は、動名詞補部の前にカンマの音調を置けば容認されるが、カンマの音調がない場合には容認不可能であると述べている。

- (25) a. It would be surprising, your being able to find a new job.
b. It irritates him, Mary's having so many books.
(26) a. *It would be surprising your being able to find a new job.
b. *It irritates him Mary's having so many books.

ところで、Huddleston and Pullum (2002: 1407) は、次のような例をあげている。

- (27) a. It was stupid to tell my parents / ?telling my parents.
b. It would make things worse to call in the police / ?calling the police.

(27a) には主観的で感情的な意味を表す形容詞 *stupid* が用いられているにも拘らず、動名詞補部の方はやや不自然ではあるが容認されないことはないと判断されている。(27b) においても述部は主観的な意味合いを持っていると考えられるので、動名詞補部が完全に容認されてもよいはずであるが、ここでも動名詞補部はやや不自然ながら可能であると考えられている。また、いずれの例文においても to-不定詞補部は申し分ないことが分かる。このように、かれらは、「it+be+形容詞構文」では動名詞補部を認めない立場にあるのかということそうではない。というのは、彼らは、次のように、右方転移構文 (right dislocation) と外置構文 (extraposition) とを峻別しているからである (Huddleston and Pullum 2002: 1414)。¹

- (28) a. It was interesting, listening to the debate. (right dislocation)
b. It was interesting listening to the debate. (extraposition)

現時点では、Hudson (1971) が述べているように、「it+be+形容詞構文」において動名詞補部が許容されるのは形容詞が感情的な意味合いを持つものに限られると考えておくと、その説明が (27a) にはあてはまらないのは事実である。ただここで言えることは、「it+be+形容詞構文」では、to-不定詞補部は、通例、常に許容されるということである。また、もともと動名詞補部が「it+be+形容詞構文」で用いられるよりも、それが主語になっている構文で用いられることが普通のようなのである。Huddleston and Pullum (2002: 1407) も、(27a) や (27b) をそれぞれ、Telling my parents was stupid. と Calling in the police would make thing worse. のように動名詞補部を主語位置に持つ文に言い換えると全く問題がなくなると述べている。

本節の要点をまとめてみると、Finding work is difficult these days. や Wind-surfing is popular. (Alexander 1988: 317) のように動名詞補部を主語にした文は問題なく用いられるが、外置構文の形をとる場合は、述語に制限がある。客観的な判断を表す *illegal* や *important* などのような形容詞は、この構文からは排除されるが、*fun*、*nice*、*irritating*、*crazy* などのように話し手の主観的・感情的な意味の形容詞のみが外置構文で許されるということになる。また、to-不定詞を主語に

¹ Dixon (2005: 48) にも、It was admired, Mary's singing 'Salty Dog' in church の例が見られるが、it は Mary's singing 'Salty Dog' in church を示している。

した文は珍しいが、外置構文で最も一般的に用いられるとしてよいであろう。²

2. to-不定詞

2.1. to-不定詞補部における to が表す意味

to-不定詞補部に関して、Bolinger (1977: 13) は、“hypothetical”な内容を、Dixon (1984: 590) は、“yet unrealized activities”を、Quirk et al, (1985: 1191) は、“potentiality”を、Declerck (1991: 503) は、“a potential future situation”を、Dixon (1984: 592) は unrealized な内容を、そして Duffley (2000: 224) は、“subsequent potentiality”あるいは“subsequent actualization”を表すとそれぞれ述べている。つまり、to-不定詞補部では、仮定的な事柄、まだ表現されていない行為、あるいは可能性などが述べられると主張されているわけであるが、それは to-不定詞の to が元來前置詞の to に由来するからである。本來的に to-不定詞の to は前置詞の to と出所が同じであるため、それは、前置詞 to と同様に toward あるいは in the direction of を意味する (Curme (1931: 456), Rudanko (1989: 35), Huddleston and Pullum (2002: 1241), Smith and Escobedo (2002: 552-3))。このように、to-不定詞補部の to にも空間的に「～の方向に」という意味を表すだけではなく、その拡張として、時間的にも「(未来) に向かって」の意味を認めることができるため、未来時に言及する内容と fit するのもうなずけるわけである。要するに、to X おいては、X は目標 (goal) であり、この目標に向かって移動していくイメージを to X は表すと考えられる。Wierzbicka (1988: 29) は、to-不定詞補部は、大雑把に言って、「欲求 (wanting)」の概念を含意するとしているが、この概念は「未来性 (futurity)」の概念につながる。何がしかの欲求が生じそれを未来時において実現させようとする意味を共通に持っているのが aim, expect, hope, intend, want, wish などの動詞であり、これらの動詞が to-不定詞補部を従えることもうなずける。上で見たように、to-不定詞補部は、「仮定的な内容」「未実現の行為」「可能性」などを表すとされているが、要するに、to-不定詞補部は、「目標への到達に向けての移動」を表すると集約することができるように思われる。また、to は、「方向」だけではなく「到達」を意味する。なぜなら、例えば、She managed to escape from the burning car. (OALD) に

見られる manage や We got to meet all the stars after the show. (LDOCE) に見られる get などが主動詞の場合、to-不定詞補部を従えるが、この場合、to は、「到達点」を意味するからに他ならないからである。しかし、これは manage や get が含意動詞であるからであり、基本的には to そのものが「方向」を表すということに変わりはない。

さらに、to-不定詞が「判断」を表す構文においても見られる。Riddle (1975) が述べているように、判断を表す構文においては、to-不定詞は話し手の「主観的判断」を表す。そして、to-不定詞の内容に関しては、その内容が真である状態への方向に向いてはいるが、その状態への到達には至っていないいわば宙ぶらりんの状態を描写しているとしてよいであろう。この見方は、結局のところ to に「可能性」や「未実現」の意味があることに起因する。例えば、I believe him to be honest. は、話し手が目的語の him に対する判断、すなわち him に関して honest であるという信念があることを述べているが、あくまでもその判断は be honest の方向に向いているということが述べられている。もし honest であることが「真」である場合は、当然ながら He is honest. で表現されることは言うまでもない。

また、Smith and Escobedo (2001: 552) は、to-不定詞補部の to に関して、それは、source-path-goal のイメージスキーマを喚起すると述べている。このイメージスキーマは、ある entity がスタート地点に相当する source から経路 (path) を通って目標 (goal) に向けて移動するというものである。Smith and Escobedo は、このイメージスキーマに基づいて、to は、様々な領域で未来性 (futurity)、目的 (purpose)、意図 (intention) あるいはこれらが混合した意味を喚起すると主張している。いずれにせよ、基本的には、前置詞 to と to-不定詞の to は同根であるので、両者が表す核となる意味は共通するわけである。to-不定詞補部の to に関して、Lindstromberg (1998: 191) は、a path toward a goal、Smith and Escobedo (2001: 550) は、some aspect of the path-goal sense、また Langacker (2008: 439) は、a path-goal configuration を表すと述べているが、彼らは共通して to は「ある entity が path に沿って移動して goal に向かう」イメージを表すために用いられると考えている。いずれにせよ、to-不定詞補部の to は、「方向」と「到達」を表すとしてよいであろう。³

² to-不定詞が主語になっている事例をあげておく。To start the process of eschewing easy pleasures and engaging in more gratification is hard. (M. Seligman, Authentic Happiness, p.9)

³ 実際、I'm glad to see you. 型の「反射的」な用法も存在するが、この用法に関しては紙幅の関係で別稿で考察する。

2.2. to-不定詞補部における to の機能

to-不定詞補部は、自動詞と他動詞のいずれにも後続するが、この節では、to-不定詞補部が他動詞の直後に続く場合について見ていくことにする。例えば、次の (29a) における to-不定詞補部は、prefer の直接目的語として機能していると考えられる。その妥当性は、to-不定詞補部は直接目的語であるので、受動化や擬似分裂文化が可能となっている (29b) と (29c) の例からうかがえる (Duffley 2000: 229)。

- (29) a. Everyone preferred to remain silent.
 b. To remain silent was preferred by everyone.
 c. What everyone preferred was to remain silent.

確かに、prefer のような動詞が用いられている場合には、to-不定詞補部が直接目的語として扱えるのであるが、Mair (1990: 105) は、attempt-class of verbs に関しては、to-不定詞補部を目的語としてみなすことは便利ではあるが、次のように、主動詞は通常の方法で受動化することができないことを指摘している。したがって、次のような場合は、to-不定詞補部を直接目的語として扱うことができないことになる。

- (30) a. She attempted/wanted/decided/etc. to ask a question.
 b. *To ask a question was attempted/wanted/decided/etc.

(30) のような例に加えて、Duffley (2004: 369) にも、to-不定詞補部が名詞句として成立していない例が見られる。

- (31) a. The more tired they were, the less getting up early was liked.
 b. *The more tired they were, the less to get up early was liked.

Duffley (2004: 370) は、さらに次の例をあげ、to-不定詞補部が直接目的語として扱うことができない例があることを指摘している。もし、to-不定詞補部が名詞句であれば、それを代名詞で言い換え可能であるが、そうではないことが次の例で確認できる。その代わりに、前方照応的な it ではなく to が用いられると (32b) のような適格

な文となる。

- (32) a. *On Saturday Pam likes to play with her friends and Mary also likes it.
 b. On Saturday Pam likes to play with her friends and Mary also likes to.

しかし、(29) で見たように、確かに prefer が用いられる場合は、to-不定詞補部を直接目的語として認めることができるし、次のように、to-不定詞句が、主語や直接目的語の名詞の機能がはっきりと確認できる場合があることは確かである (Duffley 2000: 201)。

- (33) a. Not to participate would be foolish.
 b. That/It would be foolish.
 (34) a. I consider not to participate a bad idea.
 b. I consider that a bad idea.

もっとも、上例に見られるように、Duffley (1999, 2000, 2004) は、to-不定詞補部が名詞句として機能する可能性があることは認めてはいるが、このような事例はごく少なく、大部分の場合において、to-不定詞補部を目標 (goal) あるいは結果 (result) を示す前置詞句と見なすべきであると主張している。例えば、Duffley (2000: 232) は、He craved to be pardoned. の to be pardoned と He craved for pardon. の for pardon が、意味的に平行関係にあることを指摘している。そして、Duffley (2000: 232) は、この to-不定詞補部が目標あるいは結果を示す副詞的な機能を有しているとする考えは、次の例からも支持できると論じている。

- (35) a. His desire to be recognized was insatiable.
 b. He was ready to fight.
 (36) a. His desire for recognition was insatiable.
 b. He was ready for a fight.

(35a) の to-不定詞補部は、his desire を修飾し、(35b) の to-不定詞補部は ready を修飾している。(35a) の his desire to be recognized と (35b) の to fight は、それぞれ (36a) の his desire for recognition と (36b) の for a fight に意味的に対応する。つまり、(35a) と (36a)、(35b) と (36b) はそれぞれ意味的に等価であり、(35a) と (35b) も to-不定詞補部は、(36a) と (36b) の前置詞句に意味的に対応している。

以上のことから、Duffley (1999, 2000, 2004) が述べているように、確かに to-不定詞補部が目標や結果を表す前置詞句として機能するという主張には根拠が認められる。ただし、Duffley は prefer のような動詞に関しては、純粹に直接目的語として扱えるとしているが、他に prefer と同じように振舞う動詞にはどのような動詞があるのかは明らかにしていない。この点に関しては更なる検討が必要である。⁴

2.3. 他動詞の目的語としての to-不定詞補部

2.3.1 「意志」「欲求」「希望」を意味する動詞と to-不定詞補部

すでに 2.1. で見たように、Wierzbicka (1988: 29) は、「欲求 (desire)」を意味する動詞には to-不定詞補部が後続すると主張している。これは、未来時において実現を目指す意味を有する動詞と to-不定詞補部とは相性がよいということの意味する。次の Wierzbicka (1988: 31) があげている例を見ることにしよう。

(37) He wanted/planned/meant/proposed/chose/
decided to go.

want は「欲求」を表す典型的な動詞であり、plan は、「計画する」、mean、intend、propose は「意図する」、choose は「選択する」、decide は「決意する」をそれぞれ表すわけであるが、これらすべての動詞は共通して未来指向的な意味を持つ。(37) では、主語 he の to go へ向けての「欲求」「計画」「意図」「選択」「決意」が表現されている。これは Searle (1983: 84-7) が言う、prior intention に相当する。動詞に prior intention の意味が認められる場合には to-不定詞補部が選択されることとしてよい。「欲求」「計画」「意図」「選択」「決意」「提議」「約束」「脅迫」などの意味を表す動詞は、発話時から見てすべて未来指向的である。それゆえ、これらの動詞に後続する補部として、まさに to-不定詞補部が適格に選択されることになる。よって、ache、aim、agree、aspire、choose、decide、determine、expect、hope、long、mean、offer、plan、plot、prepare、promise、threaten、want、wish、yearn などの動詞に to-不定詞補部が後続するという事実にならずくことができる。

⁴ ただし、筆者は、次の実例を見つけている。'Do you like to travel, Sophia?' 'I adore it.' (S. Sheldon, *Morning, Noon & Night*) ここで、it が to travel の代用形として用いられているので to travel が直接目的語として捉えられていることを物語っている。

2.3.2 「不履行」を表す動詞と to-不定詞補部

例えば、refuse や decline は否定的な意味を持っているが、何かを未来において行わないとする意志性の意味が内在しているので to-不定詞補部を従える。実際、肯定的であれ否定的であれ、未来に向けて意図的に目標に向けて移動するイメージを持つ動詞は、to-不定詞補部をとる。それゆえに、I refused to pay the bill. (Smith and Escobedo 2001: 554) のように、refuse はその補部に to-不定詞をとる。つまり、refuse to ~は、「～に向かうことを拒否する」ということを言い表している。もっとも、I forgot to pay the bill. (Smith and Escobedo 2001: 554) に見られるように forget のような動詞に関しては、意図性は感じられないが、to は方向性を表すので、forget to ~は、「～に向かうことを忘れる」という意味を表すことになる。この類の動詞には、他に decline、fail、fear、forget、hesitate、neglect などがあり、「～に向かうことを「断る」「しない」「恐れる」「忘れる」「躊躇する」「怠る」こと」をそれぞれ意味するので、これらの動詞も to-不定詞補部を目的語にとるのが自然であると言えるであろう。

2.3.3 「努力」を表す動詞と to-不定詞補部

この節では、「努力動詞」に関して検討することにする。努力動詞には attempt、endeavor、get、manage、strive、struggle、try などがある。これらの動詞も共通して未来指向的な意味を持つがゆえに to-不定詞補部を従える。また、manage と get については、すでに述べたように、これらは含意動詞であり、これらが過去時制で用いられると、「目標達成」したことを表すことはよく知られているところであろう。なお、attempt に関しては、Swan (1995: 285) や Quirk et al. (1985: 1187) は、to-不定詞補部と動名詞補部のいずれも従えるとしているが、Thomas and Martinet (1986) をはじめ、OALD や LDOCE は、to-不定詞補部にしか後続しないとしている。しかしながら、Swan や Quirk et.al が述べているように、次の (38a) に見られるように、確かに、attempt が動名詞補部を従える例が COCA で検索される。また、次の (38b) に見られるように、Egan (2008: 325) も attempt が to-不定詞補部だけでなく動名詞補部も従える実例をあげている。

(38) a. He was also convicted of *attempted obstructing* justice in a 2014 case in which his co-defenders were accused of selling drugs in the same home as a

- child. (COCA)
- b. And she couldn't do anything about Castelfonte, she couldn't even get them to *attempt making* it profitable – she never understood about the land, that wasn't in her blood.

しかし、tryに関する解釈と attemptに関する解釈は共通しているのではないかと思われる。周知のように、tryに to-不定詞補部が後続すると、その内容は未実現なものとなつて、動名詞補部が続くとその内容は現実化したことを表す。この try に後続する to-不定詞補部と動名詞補部の意味的な違いは、恐らく、attempt に関しても同じではないかと思われる。いずれにせよ、何かを成し遂げようとする行為は未来志向的である。つまり、そのような意味を持つ動詞の後に、目標に向けて移動するイメージを喚起する to 不定詞が適切であることは間違いないであろう。

2.3.4. 「主張」を表す動詞と to-不定詞補部

次に「主張動詞」とでも呼べる動詞には、claim、purport、profess、feign、pretend などがあるが、これらもすべてその補部に to-不定詞を従える。例えば、次の例文を見ることにしよう。

- (39) He claims to be 27 years old, but his round face and awkward manner made him much younger. (COCA)

claim のような動詞は to-不定詞補部の内容を聞き手に信じさせようとする意味合いがあるわけであり、to を用いることによって to 以下の事態あるいは状況への比喩的な移動を表していると考えられる。feign や pretend も事実でない事態をまるで真であるかのように伝える意味合いがあるので、claim と同じように to-不定詞補部の内容を聞き手に信じさせようとすることを意味する。⁵したがって、これらの動詞の後は to 以下の事態への比喩的な移動が表現されるものと思われる。これらの動詞が未来指向の意味を持つ動詞に to-不定詞補部が後続するのは、主節の事態と従節の事態との間に空間的・時間的な距離感があるからであり、to がその距離感を象徴していると考えられる。また、to に本来的に「方向性」

「未来志向性」の概念が張り付いているので、「何がしかの事態への移動」「何がしかの行為を未来に生起させる欲求」を意味する動詞類と to は相性が良いのである。

2.3.5. 「思考・判断・認識」を表す自動詞と to-不定詞補部

よく知られているように、例えば、appear、seem などの自動詞は、John appeared/seemed to understand the problem. (Smith and Escobedo 2001: 555) のように用いられる。Smith and Escobedo が指摘するように、この例文においては、to 以下に「目標」が表されているわけではない。appear や seem は元より自動詞であるので、話し手が to 以下の内容を現実化させようとする意図を表す意味はもちろんだ。では、なぜこれらの認識動詞の後に to-不定詞補部が選択されるのであろうか。Smith and Escobedo (2001: 555) は、to の path (通路) の意味が図像的に主節の主張 (命題) と従節の主張 (命題) との間の概念的な距離 (conceptual distance) を喚起すると主張して主張している。彼らの主張に従うと、John appeared/seemed と to understand the problem の間に概念的な距離があり、その距離感を象徴するのが to ということになり、to understand the problem という主張 (命題) は「その問題を理解する」方向に移動しているイメージを表す。この主節の命題と従節の命題の間に概念的な距離が存在することを to が象徴するとする考え方は上で見た欲求を表す動詞類と to-不定詞補部の間に見られる空間的・時間的な距離あるとする考え方と平行的であると思われる。いずれにせよ、to が主節の事態と従節の事態との間に概念的な隔たりを象徴すると捉えることには妥当性が認められるが、結局、このような概念上の距離という概念は、to が基本的に表す「方向性」に帰することができるように思われる。すなわち、John appeared/seemed to understand the problem. は、「ジョンはその問題を理解している方向にあるように思われた」ということを述べており、to が表す「方向性」の概念で、このような文を解釈することもできると考えられる。

2.3.6. 「思考・判断・認識」を表す他動詞と to-不定詞補部

思考・判断・認識を表す動詞には、assume、believe、consider、find、judge、know、presume、suppose、think などがあるが、これらの動詞は対象である目的語を直接目的語にとる場合は、直後に to-不定詞補部、つまり、V+O+to-infinitive の形式をとる。例えば、I believe him

⁵ ただし、feign に関しては、The Spurs striker is alleged to have feigned being head-butted by Coventry's Andy Pearce. (Egan 2008:354) のように動名詞補部を従える例も存在する。

to be honest. のタイプの文が存在する。上であげた思考・判断・認識を表す動詞はこの型の構文を許すが、to-不定詞補部の代わりに動名詞補部が現れることはない。この型の構文は、話し手あるいは文主語の主観的な判断を表すのに用いられるといわれている (Riddle 1975, Wierzbicka 1988, Dixon 1995)。Mair (1990: 200) も “... the infinitival construction generally serve to express a combination of knowledge and subjective judgment rather than plain knowledge.” と説明している。したがって、I know Mary to be a Mormon. (Wierzbicka 1988: 49) のような文も文主語 I が、メアリーのことをモルモン教徒であると判断していると解釈できるであろう。この「思考・判断・認識を表す動詞+目的語+to-不定詞補部」タイプの構文における to も、これまで見てきたように、主動詞が表す内容と補部が表す内容との間の距離感を表現する機能を持っているように思われる。このタイプの構文は、客観的なデータや話し手を取り巻く環境 (場面) や文脈などを判断の要素としながら「主観的・個人的な判断」を表明するのだが、to の存在により、その判断が to 以下の内容に向かっていくというイメージをもたらすと考えられる。すでに上で述べたように、やはり to の基本的な意味は、「到達点 (目標) へ向けての移動」ということであり、このイメージがこの構文においても生きていると考えられる (Duffley 2000: 233)。この to の機能の説明は、次の節で検討する causative な意味を表す動詞類と to-不定詞補部の関係にも適用することができるであろう。

2.3.7. 「命令」「依頼」「奨励」「提案」などを表す動詞と to-不定詞補部

この節では、「命令」「依頼」「許可」「助言」「奨励」「提案」「強制」「脅迫」などを表す動詞類に関して見ておくことにする。ある発話行為を行って第三者に何かをさせる、あるいはさせようとする意味を持つ動詞は数多くあるが、例えば advise, allow, ask, demand, encourage, order, recommend, suggest, force, tell, threaten などがある。次の Thomson and Martinet (1980: 234) であげられている例文を観察することにしよう。

- (40) a. She recommends housewives to buy the big tins.
 b. They don't allow us to park here.
 c. He advised me to apply at once.
 (41) a. He advised applying at once.

- b. She recommends buying the big tins.
 c. They don't allow parking.

(40a) (40b) (40c) では動詞の後に目的語が続いており、そしてその後に to-不定詞補部が続いている。イメージとして捉えられるのは、これらの動詞は、目的語である対象を to 以下に移動させるあるいはさせようと促す意味を持っているということである。また、主動詞が表すイベントと to-不定詞補部が表すイベントの間には時間的な隔たりが to によって象徴されているとも考えられ、それが理由で to-不定詞補部が用いられていると考えられる。(40a) ~ (40c) には、それぞれ目的語が現れているが、(41a) ~ (41c) では、対象にあたる目的語がなく、対象を特定していない格好になっている。つまり、動詞の直後に動名詞補部が後続している。このような場合、目的語は表面に現れていないが、目的語に相当する対象は、聞き手あるいは聞き手を含む第三者ということになる。⁶ いずれにせよ、ここでの要点は、誰かに何がしかの行為に向かわせるように促す動詞 (使役的な意味を持つ動詞) に目的語が伴う場合は、常に to-不定詞補部が用いられるということになる。

3. 動名詞

3.1. 動名詞が表す意味

Leech (1971: 108) は、次例をあげて、動名詞は factual meaning を表し、その一方で、to-不定詞は theoretical meaning と述べている。

- (42) a. His recognizing his fault is a good thing.
 b. It's a good thing for him to recognize his fault.

Leech によると、(42a) は、factual sentence であり、動名詞補部は事実を表しており、その一方、(42b) は theoretical な内容が to-不定詞補部で表現されているという。Kiparsky and Kiparsky (1971: 164) も、次の (43b) は話し手が事実であると思っている内容を表す文であるが、(43a) は to-不定詞補部が表す内容についてそれが真であるともそうでないとも述べていない中立的な

⁶ Verspoor (1996: 448) は、We advise you to leave early. と We advise leaving early. の例をあげ、前者については、we が権威的で直接的に対象である you に対して to-不定詞補部の内容をさせようとする響きがある一方で、後者については、補部の内容を押しつけるような意味合いはなく、中立的で丁寧に助言をしている文であると説明している。

(neutral) 態度を表明している文であると述べている。

- (43) a. They reported the enemy to have suffered a decisive defeat.
b. They reported the enemy's having suffered a decisive defeat.

このように、動名詞補部に対して「事実」を表す解釈が成り立つ。また、Quirk et al. (1985) は、動名詞補部は「遂行 (performance)」を示すとして、例えば、She enjoyed learning French. をその例にあげているが、この performance は、Declerck (1991) が述べている「行為 (action)」と基本的に同じと見てよいように思われる。以上、動名詞補部が「事実」を表す場合があることを確認した。

しかしながら、次のように、imagine や fancy のような想像動詞の後にも動名詞補部が後続する。これらの動名詞補部では実際の行為が述べられているのではなく、アイデアあるいはイメージが述べられているのであり、これらの動名詞補部は、「概念レベルの行為」を表すと解釈すればよいように思われる。

- (44) a. I *imagine teaching* them to ride a bike. (SkELL)
b. Let her go and see if she *fancies staying* there. (SkELL)

以上のように、動名詞はある行為を事実として描写することに加え、話し手の頭の中のアイデアやイメージを描写するのに用いられていることを確認した。以下で、さらに動名詞に関して見ていくことにする。

3.2. 動名詞の機能

Duffley (2000: 226-229) は、主動詞に直接後続する動名詞について、それは直接目的語の機能を持つと主張している。例えば、彼は次の (45a) を例にあげ、playing tennis on the new courts は enjoy の直接目的語である述べており、その根拠として、(45b) のように (45a) の受動化が、また、(45c) のように擬似分裂文が可能であるからと説明している。さらに、(45d) に見られる playing tennis on the new court を代名詞の it で代用できることから、確かにその名詞性がうかがえる。

- (45) a. Everyone enjoyed playing tennis on the new court.

- b. Playing tennis on the new court was enjoyed by everyone.
c. What everyone enjoyed was playing tennis on the new court.
d. Yes, everyone enjoyed it.

また、次の小西 (1980: 872) があげている例文を見ることにしよう。

- (46) a. She once liked watching television and physical exercise both.
b. *She once liked to watch television and physical exercise both.

(46a) から動名詞 watching television とそれに続く名詞句 physical exercise が等位接続されているところから、watching television と physical exercise が機能的に等価であることがうかがえる。以上の事実から、問題なく動名詞を名詞句として扱うことができるであろう。

Duffley (2000: 229) は、動名詞に関して次のようにまとめている。

- (47) As direct object of the matrix verb, the -ing merely denotes that which is "[verb]led," and it is lexical content of the matrix that implies whether the -ing's event is prior, contemporaneous, or subsequent to the event denoted by the governing verb or in no form of temporal relation at all to the latter.

この Duffley の説明が基本的に妥当であると考えられるが、以下で個々の主動詞を見ながらそのことを検証していくことにする。

3.3. 動名詞補部を従える動詞

3.3.1. 「放棄」「廃止」「中止」「中断」「終了」「完了」を意味する動詞と動名詞補部

例えば、abandon, abolish, discontinue, give up, quit, stop などのような「中断」や「中止」を意味する動詞、あるいは complete, end, finish などのような「終了」「完了」を表す動詞には動名詞補部が後続する。何がしかの行為や状態がすでに存在していることが前提となっていないとその行為なり状態を中止したり放棄したり、あるいは完了するという事態は成立しない。言い換えると、何がしかの事実や既存の事態が動名詞補部で表現さ

れるということになる。例として、She says she *abandoned acting* shortly after the Toback incident, tired of being exploited by men in the business. (COCA) と Fisher, 60, had just *finished filming* for “Star Wars: The Last jedi,” which will debut Dec. (COCA) をあげておく。「始動」「中止」「終了」を表す相動詞については 4.2. で 観察することにする。

3.3.2. 「不履行」を意味する動詞と否定的な態度を意味する動詞と動名詞補部

例えば、avoid, ban, defer, delay, escape, impede, miss, postpone, prevent, prohibit, put off, resist, reject, save, shun, skip, stop, veto などの「回避」「禁止」「延期」「阻止」「抵抗」「拒否」「中止」「否認」などの意味を持つ動詞の後にも動名詞補部が後続するが、これらの動詞は否定的な態度を表明する動詞と言える。そのような態度を意味する動詞も、既存の対象物の存在を前提としており、その存在は動名詞補部で表現される。つまり、何がしかの対象になるものがすでに存在していることを前提としていることを表す動詞の後には動名詞補部が続く。上記の動詞に共通する意味は、おおざっぱに述べると、「不履行」という言葉で括れるのではないかとと思われる。この不履行を表す動詞 avoid と resist の例として、The refugees left to *avoid getting* bombed. (LDOCE) と The bank strongly *resisted cutting* interest rates. (OALD) をそれぞれあげておく。

実際、Declerck (1991: 504) も否定的な態度を表明する数多くの動詞がその補部に動名詞補部をとることを指摘している。これらの動詞に共通する特徴として考えられるのは、上で述べたように、何がしかの対象物がすでに存在していることを前提としていることであり、もしそのような対象物が存在しないのであれば、それを「嫌う」「批判する」「無視する」あるいは、「反対する」ことはできない。具体的には、そのような内容を表す動詞に、abhor, criticize, deplore, despair, detest, dislike, dispute, disregard, envy, grudge, hate, ignore, loathe, mind, oppose, resent, restrict, undervalue, withstand などがある。ここでも I *abhor living* in the country. (Verspoor 1996: 446) と I *hate lying*. (Huddleston and Pullum 2002: 1065) の二例だけをあげておく。

以上のように、補部の内容に対して否定的な意味内容を表す動詞類が動名詞補部と相性がよいことが分かる。しかしながら、実際、「賞賛」「感謝」「享楽」「支持」「寛容」などのプラス評価や肯定的な意味を表す admire, adore, advocate, appreciate, cherish, defend, endorse,

enjoy, favor, forgive, praise, support, prize, relish, tolerate, value などの動詞の後にも動名詞補部が続く。ここでも言えることは、補部で述べられている内容は、抽象的な概念であれ具体物であれ、いずれもその存在が前提となっているということである。したがって、この場合にも当然ながら動名詞補部が後続することが予測できよう。例として、I *adored getting* drunk and I *adored reading* in the papers what I had done the night before. (Egan 2008: 321) と Nobody *relishes cleaning* the oven. (OALD) をあげておく。

結局、補部の内容に対して「否定的」「肯定的」のいずれの態度表明をする動詞にも動名詞補部が後続するということになるわけであるが、いずれも何がしかの対象物がすでに存在していることが前提となっているわけである。

4. to-不定詞補部と動名詞補部のいずれも従える動詞に関して

4.1. 「好悪」を表す動詞と補部

好悪を表す動詞には、abhor, detest, dislike, like, loathe, love, hate, prefer などがある。嫌悪を表す abhor, detest, dislike, loathe などは、概して動名詞補部を従える。⁷ その理由は、to がその意味として「方向性」を持っているからであり、通例、人は自ら進んで嫌悪するものに向かっていくことはないからであろう。⁸ その一方で、愛好を表す like, love, prefer などは、to-不定詞補部と動名詞補部のいずれをも従える。

本節では、like に関して以下で検討することにする。古くは、Bladon (1968) に好悪動詞に関する論考がある。彼は like が、to-不定詞を従える場合、それは want や desire と意味的に等価であり、「欲求」を表し、like が動名詞を従える場合、それは enjoy と意味的に等価であると述べている。Bladon (1968: 211) があげている次の例を見ることにしよう。

- (48) a. Do you like to fly home? (DESIRE)
b. Do you like flying home? (ENJOYMENT)

⁷ 中島 (2017: 162) は、dislike, detest 及び loathe は、to-不定詞補部をとらないと述べているが、She dislikes to be told things and dislikes change. ... I detest to make it ..., あるいは、He loathed to be in the room now. などのようにそれぞれの動詞に to-不定詞補部が後続している例が SkELL で見られる。
⁸ ただし、hate は to-不定詞補部と動名詞補部のいずれをもとるが、hate to V は、don't want to V に意味的に等しいので、to-不定詞補部を自然にとる。

Bladon (1968) は、to-不定詞補部では「欲求」が述べられ、動名詞補部では「楽しみ」が述べられるという説明をしている。また、次のように、過去形の liked が現れている例に関しては、文末に強勢が置かれた場合は、欲求が満たされたこと (desire-fulfilled) を表し、その一方、動詞に強勢が置かれた場合、楽しみが実現化 (enjoyment-actual) されたことを表すと説明している。つまり、Bladon (1968: 212-3) は、次の (49a) (49b) に見られるように、to-不定詞補部に二つの違った解釈が可能であり、音調でその違いが具現化されるとしている。

- (49) a. She liked to have breakfast in / bed.
(desire-fulfilled)
b. She / liked to have breakfast in bed.
(enjoyment-actual)

さらに、enjoyment-actual を示す She / liked to have breakfast in bed. と同じく enjoyment-actual を示す She liked having breakfast in bed. に関して、前者は、「文主語 she がたまにベッドでの朝食を楽しんだ」ことを表し、後者は、「文主語 she がその行為を頻繁に楽しんだ」ことを表しているという。つまり、Bladon (1968: 213) は、「like+to-不定詞構文」では、補部の内容が「時々」生起することが表されるのに対し「like+動名詞構文」では、補部の内容が「頻繁に」生起することが表されると述べ、両者に違いを認めている。

デ・シェン (1997: 167) は、例えば、I like to sleep late on Sundays. と I like sleeping late on Sundays. の間に特に意味的な差異は感じられないと述べている。しかし、デ・シェン (1997: 168) は、例えば、What should we do this weekend? といった疑問文の後では、(50a) は自然な答えだが、(50b) は答えとしてかなりおかしく、一方、What did you like about the weekend? といった疑問文に対しては、(51a) は不適格であり、(51b) が可能な答えになると述べている。⁹

- (50) a. I'd like to sleep late on Sunday.
b. ??I'd like sleeping late on Sunday.
(51) a. *I liked to sleep late on Sunday.
b. I liked sleeping late on Sunday.

⁹ 実際、would like+動名詞補部構文である、See how you would like living over- crowded accommodation. (SkELL) のような実例が存在する。この構文については柏野 (1993: 220) を参照のこと。

ここでは、従来から言われているように、to-不定詞が「未来性」を表し、動名詞のが「現実性」を表すという説明が成立するであろう。

Taylor (2002: 433) は、to-不定詞は、特定のな内容を表し、動名詞は一般的な内容を表すとし、次の例をあげている。

- (52) a. I would like to go for a walk.
b. I like going for a walk.

Taylor によると、(52a) は未来に向けての欲求を表し、(52b) は一般的な内容に言及するという。すでに第1節で Taylor が、to-不定詞補部は「特定性」を表し、動名詞補部は「一般的陳述」を表すと述べているのを見たが、彼は、like の補部に関しても同様の説明が当てはまるとしている。また、Ungerer and Schmid (1996: 269) は、I like to spend Sunday mornings in bed. は、「習慣 (habit)」を表し、I like spending Sunday mornings in bed. は、「一般的陳述 (general statement)」を表すとしている。¹⁰

しかしながら、次の Bladon (1968: 209) があげている例についてはどうであろうか。

- (53) a. Men never like to be thought coward.
(particular???)
b. I didn't like eating my first French meal.
(general???)

(53a) は、「一般的に人は臆病であると思われることを嫌う」という解釈が可能であり、特定のな内容に言及しているとする解釈に無理があると考えられる例である。また、(53b) からは、文主語 I が初めてフランス料理を食べた特定のな内容が読み取れるのであり、この文が一般的な内容に言及していないことは明らかである。よって、第1節で見たとおり、to-不定詞補部と動名詞補部の違いとして、必ずしも to-不定詞補部の特徴づけとして「特定性」という概念がまた動名詞補部の特徴づけとして「一般性」という概念がそれぞれ有効であるとは必ずしも言えない場合があることがここでも確認できる。

Huddleston and Pullum (2002: 1241) にも、like が

¹⁰ しかしながら、筆者のあるインフォーマントは、I like to stay home on the weekend. の例を、a general expression of what I like to do on week- ends と解釈した。この説明は、Dirven (1989) や Ungere and Schmid (1996) の説と正反対の説明である。以下で見る高見・久野 (2017) の説明も参照のこと。

to-不定詞補部を従える場合と動名詞補部を従える場合の説明が見られる。彼らは、次の (54a) と (54b) の例をあげて、週末にハイキングに誘われたが、それを断りたいと思っている話者は (54a) を選択し、現在週末に家にいることを現実を楽しんでいることを言いたい場面では、話者は、(54b) を適切な文として選択するとしている。

- (54) a. I like to stay home at weekends.
b. I like staying home at weekends.

Huddleston and Pullum (2002: 1241) は、to-不定詞は、動名詞に比べ「変化 (change)」をより連想させるが、その一方で、動名詞は、「現実性 (actuality)」を連想させると述べている。例えば、最近 40 歳になった人は、I like being forty. と、また、最近結婚した人は、I like being married. と表現するであろうと述べている。これらの例では、like は意味的に enjoy に近いという。また、Langacker (2008: 440) も like+to-不定詞構文と like+動名詞構文に関して違いを認めている。彼は、前者は、a positive inclination to the idea of Ving を、一方、後者は actual experience を表すと述べている。したがって、I like to run but don't like running. は矛盾しない文であり、I like the idea of running (I know it's good for me) but not the experience. を意味するという。このように、Langacker は、like to-不定詞補構文と like+動名詞構文の補部が表す意味に違いを認めているのであるが、その理由は、to が「方向性」、ing が「現実性」に言及すると認識しているためであろう。

ところで、Declerck (1991: 509) は、“The infinitive is used if there is an idea of habitual actualization, i.e. when the speaker expresses that the referent of the S regularly chooses (not) to do something (often in a context specifying the reason for this choice).” と述べ、次のように、like+to-不定詞構文が、「習慣」を表す例をあげている。

- (55) a. I like to sleep late on Sundays.
b. I like to use a word processor. It makes writing much easier.

また、De Smet and Cuyckens (2005: 10) も、次の例文をあげて、like+to-不定詞構文が「習慣」を表すと述べている。

- (56) All drivers had bad habits: Schumacher likes to fiddle with the electric wing-mirror adjustment knob while notching the tail of the car round the steep Brooklands bend at over 80mph, sideways.

以上のことから、like+to-不定詞構文は、「欲求 (意志)」だけではなく「習慣」を表すこともあることが確認できる。

さらに、Swan (2016: 105) も、like to-不定詞構文が、「習慣 (habit)」に加えて「選択 (choice)」を表すと述べているが、to-不定詞補部と動名詞補部のいずれも 'enjoy' の意味を表し得ると述べ、I like climbing / to climb mountains. を例にあげている。すると、Swan は、デ・シェン同様、like の後にいずれの補部を用いても意味的に変わらないと考えていることが確認できるが、When I pour tea I like to put the milk in first. の例では、like は choose に等しいとしており、「選択」を表す場合については like の後に to-不定詞補部が続くパターンが動名詞補部より自然であるとしている。

ところで、久野・高見 (2016: 71) は、次の各例をあげ、like+to-不定詞構文と like+動名詞構文の間には全く意味の違いはないと主張している。

- (57) a. I like/love {to watch / watching} documentary movies.
b. I hate {to go / going} to church.
c. I prefer {to live / living} in the city.

久野・高見は、(57a) ~ (57c) の例文すべてに関して、to-不定詞補部を用いようが動名詞補部を用いようが意味に違いはないと述べている。さらに、久野・高見 (2016: 243) は、次の二例をあげて、いずれの文も同じ意味を表すとしている。

- (58) a. John likes to spend Sunday morning in bed.
b. John likes spending Sunday morning in bed.

久野・高見 (2016: 244) は、(58a) では、「習慣」が、一方、(58b) では「一般的陳述」が述べられているとする Dirven (1989) や Ungerer and Schmid (1996) などの説明に対して異議を唱えている。その理由は、彼らのネイティブコンサルタントたちに (58a) と (58b) の違い

について尋ねた結果、全員が一様に、(58a) と (58b) に関して、両者に意味上の違いはないという判断を得たからであると述べている。ただこの結果に関して、もし、久野・高見 (2016) の調査が場面や文脈抜きで、(58a) と (58b) だけを与えたものであったとしたら、両者の違いについて彼らのコンサルタント達が意味的な違いが感じられないと回答したとしても不思議ではないであろう。筆者も、文脈や場面抜きで、単独の形で (58a) と (58b) タイプの文に関してインフォーマントに尋ねてみたが、久野・高見 (2016) のコンサルタント達と同様に、両者の違いについて認識できるほどの違いは認められないという回答を得ている。少なくとも文脈や場面抜きの場合、like に後続する to-不定詞補部と動名詞補部の間に顕著な違いは認めにくいということはあるようである。実際、高見・久野 (2016) だけではなく、Close (1975: 83) も、I wouldn't like lying in a tiny spaceship for four or five days. を例にあげ、lying を to lie に変えても意味に違いはないと述べており、また Palmer (1988: 172) も I like swimming. と I like to swim. の間に特別な意味の違いを認めていない。このように、like にいずれの補部が後続しても意味上の差異はないと述べている学者達がいることは事実である。しかし、恐らく、文脈や場面が与えられれば、to-不定詞補部と動名詞補部が微妙に使い分けられる可能性は排除できないのではないかと思われる。

ところで、Egan (2008: 162) は、次のような like+動名詞構文の例をあげ、各例における主動詞 like と動名詞補部が時間的に同時的であること、動名詞補部の表す活動あるいは事態がまさに進行中であること、また、それぞれの例文が純粹で素朴な喜び (楽しみ) の感情を表明している文であると説明している。

- (59) a. I really *like doing* things together.
b. I'm with you, for a start, and I happen to *like being* with you.

Egan (2008: 164) は、like+to-不定詞構文に関しては、述語が「一般的な性質 (general nature)」を示すとして、次のような例文をあげている。

- (60) a. Like many golfers, and professional golfers are particularly prone to this. I *liked to* alter my clubs occasionally – to change the lie of a wedge by a degree or so, or thicken the grip of a putter,

or change the swing weight of a driver.

- b. I *like to* buy British, but the candle colours became uneven, delivery was unreliable and they were expensive.

Egan (2008) は、like+to-不定詞補部を持つ文に関しては、補部が表す事態はあらゆる適切な機会に (at every suitable opportunity) 実現化されることを表すと説明している。つまり、基本的に、この like+to 不定詞構文は、二つあるいはそれ以上の選択すべき状況がありそのなかから一つを選び、そうすることによって何がしかの満足を得るようとすることを表すとしている。

Egan (2018: 162) は、like+動名詞補部構文は、like と補部が常に同時的であるとしている。次の例を見ることにする。

- (61) a. I really *like doing* things together.
b. I'm with you, for a start, and I happen to *like being* with you.
c. 'I don't like taking your money, Ruth,' he protested.

上例はすべて like と補部が同時的である例であり、特に、(61a) と (61b) は、まさに動名詞補部が行為や事態の最中にあることを示す例であると言えよう。(61c) も、文主語 I がまさにお金を差し出されている場面の発話であり、文主語 I のお金を受け取りたくない気持ちと Ruth なる人物がお金を差し出している行為が同時的であると解釈できる。実際、これは好悪動詞に関してだけ言えることではなく、動名詞は、「継続中 (進行中)」の事態の言及にも用いられることは珍しくないように思われる。¹¹

本節では、like に的を絞って観察を行なったが、like+to-不定詞構文と like+動名詞構文のいずれを用いても「特定性」と「一般性」のいずれも表すことが可能であることを見た。また、単独で like+to-不定詞構文と like+動名詞構文を比較しても顕著な違いは認められないが、場面や文脈を与えられると、to-不定詞の特徴である「未来指向性」また、動名詞の特徴である「現実性」が顔を見せることになるであろう。

¹¹ I like to swim. は、まだ泳いでいない状況で「泳ぎたい」と思う気持ちの表明に使われるが、I like swimming. は、すでに泳いでいる状況で「水泳がよいな」と述べている文であるとする説明が久保田 (2013: 82-3) に見られる。

4.2. 「相動詞」と補部

本節では、「開始」「継続」「終了」を表す相動詞 (aspectual verb) である begin, start, continue, keep, stop, quit, finish などの中で特に begin と start について考察を行う。

まず、start の例を見ることにしよう。Quirk et al. (1985: 1192) は、次の (62a) と (62b) をあげ、相動詞に関しては、to-不定詞補部あるいは動名詞補部のいずれが続いても認識できるような意味の違いはないとしている。しかし、Quirk et al. (1985) は、(63a) の to-不定詞補部は、「可能性 (potentiality)」を、一方 (63b) の動名詞補部は、「遂行 (performance)」、すなわち、実際に行われた行為を表すと述べている。つまり、Quirk et al. の説明に従えば、(63a) では、文主語 he は、話し始めたが、結局、話さなかったことが、一方、(63b) では、文主語 he は、実際に話し始めその行為が1時間以上続いたことが表現されていることになる。

- (62) a. Lucy started/continued/ceased to write while in hospital
 b. Lucy started/continued/ceased writing while in hospital.
- (63) a. He started to speak, but stopped because she objected.
 b. He started speaking and kept on for more than an hour.

次の二例も、start に to-不定詞補部と動名詞補部がそれぞれ後続している例である。これらは、Dixon (1991: 241) があげている例に筆者が手を加えたものだが、上の Quirk et al. の説明と同様に、動名詞補部は、X が Y に対して実際に行った行為を表しており、一方、to-不定詞補部は、X の Y に対する行為は、その可能性を述べるに留まり、実際には遂行されなかったことを表しているという。

- (64) a. X started hitting Y.
 b. X started to hit Y.

しかし、久野・高見 (2017: 245) は、(62a) と (62b) に関して、彼らのネイティブコンサルタントに意味的な違いがあるかどうか尋ねた結果、両者に違いは認められないという回答を得たと報告している。その証拠として、彼らは (64a) と (64b) の補部をそれぞれ入れ替えた (65a) と (65b) を彼らのネイティブコンサルタントに

見せ両者の適格性を尋ねた結果、いずれも全く問題のない文として判断されたと述べている。

- (65) a. He started to speak, and kept on for more than an hour.
 b. He started speaking, but stopped because she objected.

確かに、(65a) (65b) が矛盾のない文であるとする久野・高見 (2017) のネイティブコンサルタントの回答は、Quirk et al. (1985) や Dixon (1988) が唱えているような to-不定詞補部と動名詞補部との間の意味的な違いの存在を否定する材料となるであろう。しかし、それでも、主動詞に続く補部が動的な意味を持つのか、あるいは静的な意味を持つのか、言い換えると、補部の動詞が「行為」を表す場合と「状態」を表す場合では両者に意味的な違いが存在するように思われる。両者の違いとして、例えば、相動詞に後続する動名詞補部は、to-不定詞補部と比べて、進行中あるいは継続中の行為に言及するのにより適しているように思われる。というのは、Huddleston and Pullum (2002: 1241) は、次の (66a) と (66b) を例にあげ、動名詞補部の方が自然であると判断しているからである。これらの例文を見ると、相手が話し始めその行為を継続しようとしているところを発話者が阻止しようとしている場面が想定できる。Huddleston and Pullum が (66b) を適格であると判断している理由は、(66b) が現実には相手の話が始まりそれが継続しようとしている場面の描写として相応しいからであろう。一方、(66a) が適格性に欠けると判断されている理由は、to 不定詞補部の存在により、相手の話がまだ始まっていないことを (66a) は暗示するためであると思われる。つまり、to-不定詞補部が表す未来指向性と動名詞補部が表す現実性の概念がこの例では生きているように思われる。

- (66) a. ?Don't start to tell me how to run my life.
 b. Don't start telling me how to run my life.

(66a) と (66b) に関して、Huddleston and Pullum (2002: 1241) は、確かに上のような判断をしているのであるが、例えば、彼らは、He continued to see / seeing her every Sunday. のように continue を伴う例をあげ、to 不定詞補部と動名詞補部のいずれを用いても両者に意味的な違いはないとしている。ところが、Dixon (1991: 241) は、John continued painting the wall (despite all

distractions) と John continued to paint the wall (after that interruption) を例にあげ、前者は、壁にペンキを塗る行為が中断することなく継続したことを述べているのに対して、後者は、壁にペンキを塗る行為が一度中断した後でまた塗り始めたことを述べていると説明している。このように、主動詞が continue の場合には、補部に対する意味解釈が学者間で違っている。さらに、久野・高見 (2017: 244) は、Dixon があげているこのペアの文に関しても、ネイティブコンサルタント調査を行い、両者に意味的な違いがないとする回答を得たと報告している。このように、学者間で意見に相違が見られるのであるが、ここではそのことを指摘しておくに留め、以下でなぜ学者間で上記のような意見の相違があるのかについて検討することにする。

Huddleston and Pullum (2002: 1241) は、次の begin を伴うペアの例文をあげ、to-不定詞補部を伴う (67a) は適格文であると判断しているが、動名詞補部を伴う (67b) の適格性については懐疑的である。

- (67) a. I began to understand how she felt.
b. ?I began understanding how she felt.

周知のように、何がしかの事態が進行中・継続中であることを表す場合、「be 動詞+V-ing」の形式が用いられる。そして、「begin+V-ing」の形式も「be+V-ing」になぞらえて、V-ing が表す事態が進行中 (あるいは可変的) であることを表すと考えることが可能であるように思われる。それに対して、to-不定詞補部が begin に後続すると、ある事態から別の事態への変化 (移行) を含意するものと思われる。つまり、(67a) では、文主語 I が understand していなかった状態から understand する状態へ移行したことが to-不定詞を使用することで表現されているのではないかということである。ある状態から別の状態への移行は、The subject changes to something more serious. (SkELL) や Her voice changed to a kindly note. (SkELL) などの例に見られるように、変化や移り変わりを表現する際に change to の表現が用いられる。この表現における to は前置詞ではあるが、元来前置詞の to と to-不定詞の marker である to が同根であることから、to-不定詞補部に見られる to も「変化」や「移行」、すなわち「状態変化」を表す marker として機能していると考えられる。

さて、話を begin に戻すと、確かに、begin の後に to-不定詞補部が続く文と動名詞補部が後続する文は、場面や文脈が与えられない限り、両者に顕著な意味的な違い

は認識できないのであろう。しかし、Dirven (1989: 130) は、次の (68a) と (68b) の例をあげて、to-不定詞補部を伴う文と動名詞補部を伴う文が微妙に意味的に違っていると主張している。

- (68) a. The clock began to strike twelve. (= the first stroke)
b. The clock began striking twelve. (= various strokes)

Dirven によると、to-不定詞補部を持つ (68a) は、時計が 12 時を報じる音の最初の音を強調する文であり、一方、(68b) は、12 回鳴った音の初めのいくつかの音を強調する文であるという。また、佐藤・田中 (2009: 99) は、to-不定詞は、事態が段階的に変化する、つまり徐々に始まる、あるいは徐々に終わりに近づくことを言い表す場合に相応しく、事態が一瞬で始まったり終わったりすることを言い表すのに動名詞が相応しいと述べ、It began to rain. と It began raining. を比較している。彼らによると、前者は「漸進的な変化 (a gradual change)」を表すのに対して、後者は「突然の変化 (a sudden change)」を表すとしている。つまり、彼らによると、前者は「徐々に雨が降り始めたこと」を描写しているのに対して、後者は「突然ザット雨が降り始めたこと」を描写しているという。また、佐藤・田中 (2009: 99) は、ある事態が継続を表す場合でも、段階的な変化が予定できれば to-不定詞補部が選択され、変化のない一定状態が維持されることを表す場合は動名詞補部が選択されるとして、The snow continued to fall. と The snow kept falling. を例にあげている。この to-不定詞補部と動名詞補部に関する説明は興味深いものであるが、以下で begin に関して SkELL や COCA で見られる事例を観察することにする。

- (69) a. As the ceremony unfolded I *began to* understand why. (SkELL)
b. But day by day I *began to understand*. (SkELL)
c. In that awful moment, I *began to understand* what I had lost forever. (SkELL)
d. One day it suddenly *began to pour* torrents, ... (COCA)

- (70) a. The moment of discovery occurred when

Percy *began understanding* the importance of movies in his life.
(COCA)

- b. Over time, I was able to focus more on my breathing (my anchor) and *began understanding* the differences in the types of meditation practices.
(SkELL)

(69a) では *as the ceremony unfolded* の表現から、文主語 I が徐々に理解する状態に入っていた様子が分かる。また、(69b) においても、*day by day* という表現から、文主語 I が理解する状態に少しずつ入っていた感じが伝わってくる。したがって、(69a) と (69b) に関しては、*to-*不定詞補部が「漸進的変化」を表すとする説明があてはまる。しかしながら、(69c) と (69d) に関してはどうか。(69c) では、*in that awful moment* という表現が用いられているので、文主語が何かを永遠に失ってしまったという理解は、「瞬間的」なものと思われ、解されるであろう。するとこれは突然の変化を表す例であると解釈できるように思われる。また、(69d) においても *suddenly* という副詞が *began to* と共起しており、「突然の変化」が述べられている。さらに、*She suddenly began to feel very calm.* (SkELL) や *Mitch suddenly began to shiver, then, as if losing control, he began to shake with cold ...* (COCA) のように *suddenly* が共起している例は容易に見つかる。

以上のことから、*to-*不定詞補部が必ずしも「漸進的な変化」を表すわけではなく、「突然の変化」を表すことがあることも確認できる。では、*begin* の後に動名詞補部が続く (70a) と (70b) についてはどうか。(70a) では、*the moment of discovery* という表現と *began understanding* 以下の内容が同時的であるとする解釈が成立する。したがって、文の内容から動名詞補部の内容は「突然の変化」を表すと解釈できるであろう。一方、(70b) では文頭に *over time* という表現が用いられているところからすると、文内容は「漸進的な変化」を表していると解釈できる。すると、これは動名詞補部では「突然の変化」が表現されるとする説明と矛盾することになる。したがって、動名詞補部であっても「突然の変化」を表すこともあることになる。

また、Wierzbicka (1988: 86) は認識動詞を補部に持つ文 **Suddenly, I started realizing what had happened.* を例にあげ、その不適格性を主張している。Wierzbicka は、その理由として、動名詞補部は *a stretch of time* (ひ

と続きの時間) に言及しており「動的過程 (dynamic process)」の解釈が適応されるからであると述べている。そして、過程を表すということは「絶えざる変化の可能性 (constant possibility of change)」を含意するので、例えば、*???Around that time, I started knowing the answer.* は極めてその適格性が低いとしている。私見では *know the answer* という表現自体がそもそも安定した状態表現であり、この表現自体に可変性は見出し難いものと思われる。「答えを知っている」状態を表現する場合は通例、単純現在形の *know* を用いて *I know the answer.* と表現されるのであり、**I'm knowing the answer.* は、不適格な表現である。ただし、*know* が起動的に「認識する」あるいは「気付く」のような意味で用いられる場合には *start knowing* は許される。そのような例を以下で見ることにする。

- (71) a. So he kept seeing them and meeting them in street, etc. He even *started knowing* a couple of them. (SkELL)
b. We *started knowing* what to do... (SkELL)

(71a) の *started knowing* は「～と親しくなり始めた」を意味する。また、(71b) の *started knowing* は、「～が分かり始めた」のような解釈が成立するものと思われる。つまり、*know* が静的な *have information* の意味ではなく、起動的な「認識」「理解」の意味で用いられる場合は *start knowing* が「認識し始める」「分かり始める」の意味で用いられる。

さて、ここで Wierzbicka が不適格と判断している **Suddenly, I started realizing what had happened.* の例文に話を戻すと、彼女は、この文の不適格性は、動名詞補部がひと続きの時間を表すがゆえに *suddenly* のような副詞と意味的に整合しないことをその理由にしている。しかし、実際は、次の (72a) のように、*start+動名詞構文* が *suddenly* と共起している例や、(72b) のように、*start+to-*不定詞構文が時間幅を表す *over time* と共起している例も存在する。

- (72) a. Initially I was just waiting for this end because I thought it's one of those just-another-novels, but I suddenly *started liking* it a lot. (COCA)
b. But over time, I *started to realize* that I could share things in much the same

way that I already do outside of Social media. (COCA)

以上の観察から、to-不定詞補部は「突然の変化」に言及し、動名詞補部は「漸進的变化」に言及するとする説明は、絶対的なものではなく相対的なものであることが分かる。したがって、認識動詞である know や realize などに関しては、いずれの補部が選択されるのかに関する基準は現時点では不明である。ただし、continue の場合と同様、少なくとも start や begin のような相動詞に続く「認識動詞」に関しては、それが to-不定詞を伴おうと動名詞の形で表現されようといずれの形式を用いても大差がないように思われる。しかし、start と begin 以外の相動詞も含めて、to-不定詞補部と動名詞補部の選択に関しては今後の課題としたい。

5. おわりに

本論では、to-不定詞と動名詞が同じ環境で生起する場合について考察を行ったが、以下で、各節の要点をまとめておく。第1節では、多くの研究者が to-不定詞が主語になっている文は、「特定性」を表し、動名詞が主語となっている文は、「一般性」を表すと述べているが、実際は、いずれが主語になっている文であっても「特定性」と「一般性」の両方を表すことがあることを見た。ただし、to-不定詞が主語となっている文は「文語的」であり、動名詞が主語となっている文は「口語的」であるという違いはある。第2節では、「It+be+形容詞+to-不定詞構文」と「It+be+形容詞+動名詞構文」について見たが、前者が、通例、一般的に用いられること、また、後者は口語的な表現であり、用いられる頻度が低く構文としては安定性が低いことを見た。第3節では、どのような主動詞にいずれの補部が後続するのかに関して考察した。どの主動詞にどちらの補部が後続するのかは完全に予測はできないが、おおざっぱな目安 (rule of thumb) としては、主動詞が表す意味が「未来指向的」である場合は、その後に to-不定詞補部が続き、主動詞が「未来指向的」以外の意味を表す場合は、その後に動名詞補部が続きとまとめることができよう。第4.1. 節では、like に to-不定詞補部と動名詞補部が後続する場合を中心に見た。実際、多くの学者が指摘している通り、特に文脈や場面が与えられていない場合には、like の後に to-不定詞補部が続く文と動名詞補部が続く文との間に認識できるほどの意味的な違いは感じられないと言えるであろう。また、like は「愛好」の概念を表すので、そこから「楽しみ」「欲求」「選択」「習慣」などの概念が連なっ

ているのは自然なことであろう。なぜなら、何か好きなことをすると「楽しみ」の感情が生まれ、それを再び行いたいという「欲求」や「選択」も生まれるであろう。このようなことから、like にいずれの補部が後続しても上で述べた概念が表現されるものと思われる。恐らく、like にまつわる構文は、「好み」「欲求」「選択」「習慣」などの概念が混淆した fuzzy な感じで用いられていると考えるのが妥当であろう。第4.2. 節では、相動詞とそれに後続する補部について考察した。この節では、起動相を表す begin と start について見たが、場面や文脈などを伴わない単独の文だけを眺めた場合、これらの相動詞に to-不定詞補部が続きと動名詞補部が続きと顕著な意味的な違いは感じられない。しかし、恐らく、何がしかの文脈や場面が与えられれば、相動詞に to-不定詞補部が続き場合と動名詞補部が続き場合では微妙に意味的な違いが感じられることが予想できる。すなわち、そのような場合は、to-不定詞が表す「未来指向性」「状態変化」が、また、動名詞が表す「現実性」「継続性」が喚起されるものと思われる。

本論で考察したことは to-不定詞と動名詞に関するほんの一部であり、更に両者の共通点と相違点について追求する必要があるが、それは今後の課題としたい。

参考文献

- Alexander, L.G. (1988) *Longman English Grammar*. Longman, London and New York.
- Bladon, R.A.W. (1968) "Selecting the *to* or *-ing* Nominals after *like, love, hate, dislike* and *prefer*," *English Studies* 49, 203-214.
- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*. Longman, London.
- ブレント・デ・シェン (1997) 『英文法の再発見』 研究社, 東京.
- Close, R.A. (1975) *A Reference Grammar for Students of English*. Longman, London.
- Curme, George O. (1931) *Syntax*. D.C. Heath, Boston.
- Declerck, Renaat (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha, Tokyo.
- De Smet, Hendrik and Hubert Cuyckens (2005) "Pragmatic Strengthening and the Meaning of Complement Constructions," *Journal of English Linguistics* 33(1), 3-34.
- Dirven, René (1989) "A Cognitive Perspective on Complementation," in Jaspers, Dany, Wim Klooster, Yvan Putseys and Pieter Seure (eds.)

- Sentential *Complementation and the Lexicon: Studies in Honor of Wim de Geest*, 113-139. Foris Publication, Dordrecht.
- Dixon, Robert M.W. (1984) "The Semantic Basis of Syntactic Properties," *Proceedings of the Berkeley Linguistic Society* 10, 583-593.
- Dixon, Robert M.W. (1991) *A New Approach to English Grammar: on Semantic Principles*. Oxford University Press, Oxford.
- Duffley, Patrick J. (1999) "The use of the infinitive and the -ing after verbs denoting the beginning, middle and end of an event," *Folia Linguistica* 33, 295-331.
- Duffley, Patrick J. (2000) "Gerund versus Infinitive as Complement of Transitive Verbs in English," *Journal of English Linguistics* 28 (3), 221-248.
- Duffely, Patrick J. (2003) "The Gerund and the to-Infinitive as Subject," *Journal of English Linguistics* 31 (4), 324-352.
- Duffely, Patrick J. (2004) "Verbs of Liking with the Infinitive and the Gerund," *English Studies* 85, 358-380.
- Duffley, Patrick J. (2006) *The English gerund-participle: a comparison with the infinitive*. Peter Lang, New York.
- Egan, Thomas. (2008) *Non-finite Complementation: A usage-based study of infinitive and -ing clauses in English*. Rodopi, Amsterdam – New York.
- Emonds, Joseph. E. (1976) *A Transformational Approach to English Syntax*. Academic Press, New York.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Hudson, R. A. (1971) *English Complex Sentences*. North-Holland, Amsterdam.
- Jespersen, Otto. (1940) *A Modern English Grammar, Part V*. Allen & Unwin. London.
- 柏野健次. (1993) 『意味論から見た語法』 研究社, 東京.
- Kiparsky, Paul and Carol. Kiparsky (1971) "Fact," *Semantics: an interdisciplinary reader in philosophy, linguistics and psychology*, ed. by Danny D. Steinberg and Leon A. Jacobovits, 345-369, Cambridge University Press, Cambridge.
- Kruisinga, Etsko. (1931) *A Handbook of Present Day English*. Noordhoff, Groningen.
- 久野暉・高見健一 (2016) 『謎解きの英文法—動詞』 くろしお出版, 東京.
- 久保田正人. (2013) 『英語学点描』 開拓社, 東京.
- 小西友七 (編) (1980) 『英語基本動詞辞典』 研究社, 東京.
- Langacker, Ronald (2008) *Cognitive Grammar : A Basic Introduction*. Oxford University Press, Oxford.
- Leech, Geoffrey N. (1971) *Meaning and the English Verb*. Longman, London.
- Lindstromberg, Seth. (1998) *English Prepositions Explained*. John Benjamin Publishing Company, Amsterdam/Philadelphia.
- Mair, Christian. (1990) *Infinitival Complement Clauses in English*. Cambridge University Press, Cambridge.
- 中島平三. (2017) 『斜めからの学校英文法』 開拓社, 東京.
- Palmer, Frank R. (1988) *The English Verb*. 2nd ed. Longman, London.
- Postal, Paul M. (1974) *On Raising: One Rule of English Grammar and Its Theoretical Implications*. MIT Press, Massachusetts.
- Poutsma, Hendrik. (1904) *A Grammar of Late Modern English, Part I*. Noordhoff, Groningen.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman, London.
- Riddle, Elizabeth. (1975) "Some Pragmatic Conditions on Complementizer Choice," *Papers from the Eleventh Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 467-74.
- Rudanko, Juhani. (1989) *Complementation and Case Grammar*. State University of New York Press, Albany.
- 佐藤芳明・田中茂範. (2009) 『レキシカル・グラマーへの招待—新しい教育英文法の可能性』 開拓社, 東京.
- Searle, John R. (1983) *Intentionality*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Smith, Michael B. and Joyce Escobedo. (2001) "The Semantics of to-infinitival vs. -ing complement constructions in English," *Proceedings from the*

Thirty Seventh Meeting of the Chicago Linguistic Society 37, 549-563.

- Swan, Michael (1995) *Practical English Usage*, 2nd ed, Oxford University Press, Oxford.
- Swan, Michael (2016) *Practical English Usage*. 4th ed. Oxford University Press, Oxford.
- Sweet, Henry (1903) *A New English Grammar*: Vol 2. Clarendon Press, Oxford.
- Taylor, John R. (2002) *Cognitive Grammar*. Oxford University Press, Oxford.
- Thomson, A.J. and A.V. Martinet. (1980) *A Practical English Grammar*. 3rd ed/ Oxford University Press, Oxford.
- Ungerer, Friedrich and Hans-Jörg Schmid. (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics*. Addison-Wesley Publications, Boston.
- Verspoor, Marjolijn. (1996) “The Story of –ing: a Subjective Perspective,” *The Construal of Space in Thought and Language*. ed. by Pütz Martin and René Dirven, 417-454, Mouton de Gruyter, Berlin
- Wierzbicka, Anna. (1988) *The Semantics of Grammar*. John Benjamins, Amsterdam.
- Zandvoort, Reinard. W. (1957) *A Handbook of English Grammar*. Longman, London.

辞書

- LDOCE6: Longman Dictionary of Contemporary English, 6th ed. (2014), Pearson Education, Harlow.
- OALD9: Oxford Advanced Learner’s Dictionary, 9th ed. (2015), Oxford University Press, Oxford.

コーパス

- COCA: The Corpus of Contemporary American English.
- SkELL: Sketch Engine for Language Learning.

(令和5年2月9日受付)